



## 2011年6月 探検と冒険の現在地

江本嘉伸

地図の空白部が地球上からなくなつて久しいが、人間である以上「挑戦する」探検や冒険の行為がなくなることはない。極地への取材経験もあり、地平線会議の代表世話人をつとめる江本嘉伸さんには、最近の探検・冒険事情を綴つてもらつた。

6月4日、兵庫県豊岡市日高町の日高文化体育館で「第15回植村直己冒険賞」授賞式が行なわれた。受賞者は、登山家、栗秋正寿(39歳)。中央アラスカ山脈三大高峰の冬季単独行に挑戦している栗秋は、1998年にマッキンリー(6,194メートル)、ウエストバットレス)、2007年には南東稜(5,304メートル)の冬季単独登頂に

成功している。残るハンター(442メートル)は、標高こそ低いが気象状況が厳しく5回の挑戦はことごとく失敗した。「冬季単独登頂のチャンスは10年に1度しかないのでは」と言いつつ挑戦を続ける栗秋の執念と挑戦の心に対して、

「2010植村直己冒険賞」が決まつたわけだ。

会場には河合雅雄、石毛直道ら

の選考委員、植村直己の母校、府中小学校の児童、西中の生徒ら800人が詰めかけ、「アラスカ垂直と水平の旅」と題した栗秋の記念講演に聞き入つた。

会報『山』2010年8月(783)号で「53泊の雪洞滞在、83日間におよんだハンター冬季単独挑戦」とのトップ記事を覚えている方も多いと思うが、栗秋の挑戦の特徴は、雪洞を駆使した登攀であることだ。私は彼の「雪洞構築技術と長期滞在哲学」にひかれ、そのことを聞いたことがある。

雪洞について栗秋は「はじめ縦穴を掘り、その後横穴を掘つて作るので45度ぐらいの傾斜が多い」「手より足で掘る、つまり足をスコップの歯の部分にあてて押し込むほうが効率的なのだと、

本にいたのだった。

栗秋が十数年、冬のアラスカの厳しい冰雪の壁と対峙してきた経

験した者だけができる話をしてくれた。硬い雪氷面に腕力を頼りにスコップをふるうのではすぐバテてしまうそうだ。

2011年(平成23年)

6月号(No.793)

社団法人 日本山岳会

The Japanese Alpine Club

定価1部 150円

会員の会報購読料は年会費に含まれています

URL●<http://www.jac.or.jp>  
e-mail●[jac-room@jac.or.jp](mailto:jac-room@jac.or.jp)

## 目 次

2011年6月 探検と冒険の現在地	1
東日本大震災で475万円の義援金	4
「雨ニモマケズ」ダッドメイン東壁初登	6
ニュージーランド山岳会の名誉会員に	7
外国人による登山150年—オールロックからメスターまで①	8
支部だより	9
北海道支部/福島支部/東九州支部活動報告	11
図書委員会	
図書紹介	12
図書受入報告	13
追悼 杉山都子さん	14
会務報告	15
ルーム日誌	16
会員異動	16
新入会員	17
INFORMATION	18
大学山岳部の復活奮闘記②	19

▶日本山岳会事務(含図書室)取扱時間	
月・火・木	10~20時
水・金	13~20時
第2、第4土曜日	閉室
第1、第3、第5土曜日	10~18時
夏季休室	8月15日~20日

験は、聞いていて新鮮で尊いものだと感じる。「10年に1度しかない」チャンスを待ち続ける強い精神は、まさに冒険者の資質、と言えるだろう。

### 「日本冒険フォーラム」の盛況

植村直己冒険賞の15回の発表の場（発表は東京で毎年2月に行なわれる）にはほとんど居合わせているが、授賞式に立ち会うのは初めてだ。豊岡市主催の「日本冒険フォーラム」が無事終了した直後だったので、今回だけは、と参加した。

5月15日、御茶ノ水の明治大学アカデミーコモン3Fアカデミーホールで、豊岡市主催の「日本冒険フォーラム」が開かれた。植村直己の故郷である豊岡市は、平成6年に植村直己冒険館を建設、平成8年には「植村直己冒険賞」を創設している。冒険賞が15回になるのを記念して植村直己の挑戦の精神をあらためて世に伝え、日本の冒険文化を創出しようと初の「日本冒険フォーラム」を計画した。私がコーディネーターを依頼され、タイトルを「2011 日本冒険フォーラム」「冒険の伝説・未来

——こんな日本人がいた。そして、今もいる——』とした。

4人の冒険者と1人のゲストに参加をお願いし、豊岡と東京を結んでの準備のさ中、3月11日、「東日本大震災」が起きた。震度

7、マグニチュード9.0という未曾有の大地震に加えて、誰も想像し得なかつた巨大な津波が日本東北各地を襲い、2万数千の尊いのちを奪つた。加えて原発の爆発と、何の罪もない住民たちの強制避難。震災と原発事故は、日本人の生き方、國のあり方を深く考えさせられる強烈な出来事である。

そんな中での「日本冒険フォーラム」。こういう時だからこそ、それをこの試練の時期に立ち上がりつつある東北各地の人々、その復興を支える日本のすべての人々に対する応援歌として位置づけ、「いのち」、「挑戦」をテーマとして開催することを私たちは決めた。嬉しかったのは、豊岡の子どもたちがこの日のために折つた「千羽コウノトリ」だ。豊岡市はコウノトリの故郷でもあり、ツルのかわりにコウノトリの折り紙が地元にある。それを折つてもらい、当日朝までに会場に運び、1055



めずらしい顔ぶれが一堂に会した

あつという間の2時間、どの冒険者の話も迫力あつたが、中でも還暦を迎えた鷹匠・松原の自然児ぶりが圧巻だった。生き物が大好きなこの人は、動物をつかまえるとともにかく食べたくなるようで、いろいろな生き物を食べる話で場内をとりこにした。

この日登場した4人は、ある意味日本を代表する冒険者だつた、と考える。そして、冒険者というのは、必ずしもエベレスト登頂者でも北極点到達者でもなく、今やどれだけ「生身の体で挑戦できるか」にあるのだ。そんな感慨を持った「日本冒険フォーラム」だつた。

手に、リヤカーマンの永瀬忠志が2枚近い2枚の木の板を手に（砂漠のふかふかした砂地でリヤカーが潜らないよう、車輪の下にあて）、山形県に住む鷹匠の松原英俊は「かしき」という木のへらを持つて（藁屋根の雪を落とすため

### 「ウメサオタダオ展」の斬新

### 「山と探検文学賞」制定の動き

日本山岳会の名誉会員でもある、故梅棹忠夫の業績と探検精神を讃える二つの試みについてふれておきたい。

大阪万博記念公園に国立民族学博物館を創設し、初代館長を20年つとめた「知の巨人」梅棹忠夫は、2010年7月3日、90歳で亡くなった。民博では巨人の業績を偲び、この3月から6月半ばまで3ヶ月にわたって「ウメサオタダオ展—知的先覚者の軌跡」が開催され、反響を呼んだ。

紙に溢れた異例の展示だった。いや、「言葉豊かな紙」の集大成と言うべきか。モンゴルのゲルを想起する広大な円形の二層の会場の壁面や空間を、1階は「山と探検」「知的生産の技術」などテーマ別に、2階は時代を順に追うかたちで、梅棹が少年時代から生涯書き続けたメモ、日記、文章、スケッチその他で埋め尽くしたのだ。カードやこざね(メモの連なり)のひとつひとつから梅棹忠夫の発想力と知性が今なお発信されている感じで、印象の深い展示だった。広大な分野で活躍した梅棹は、晩年山の世界に「回帰」したとの印象がある。私にとっては、2002年の「国際山岳年」で日本委員会特別顧問になつていただいたことが大きい。事務局長を仰せつかつた私は何度も民博に足を運

び、山についてあれこれ語る梅棹の活き活きした表情に接する機会があつたのだ。とりわけ京都・北山小屋を舞台に中学時代の山の生活を語る時は、きのうのことを話すかのように楽しげで、聞いているこちらがわくわくした。

梅棹の精神を次代に引き継ごう、と準備が進んでいるもうひとりの試みは、梅棹の年譜にも記載されている「梅棹忠夫山と探検文学賞」の創設だ。梅棹の探求の精神をフィールドで發揮した書に贈られる新しい一里塚となることを目指しているようだが、詳しくは後日お伝えしたい。

### 386回の地平線報告会と東日本大震災

地平線会議という活動を、もう32年やつている。1979年8月、ひとつひとつから梅棹忠夫の発想力と知性が今なお発信されている感じで、印象の深い展示だった。

広大な分野で活躍した梅棹は、晩年山の世界に「回帰」したとの印象がある。私にとっては、2002年の「国際山岳年」で日本委員会特別顧問になつていただいたことが大きい。事務局長を仰せつかつた私は何度も民博に足を運

超長距離ランニング、砂漠緑化、さまざまな行動スタイルの旅人を迎え、本音の報告を聞かせてもらってきた。

三十数年続いているいろいろな挑戦に出会う。最近の行動としては、グレートジャーニーで知られる探検家・医師の関野吉晴と学生たちの「黒潮カヌープロジェクト」が出色だ。日本人はどこから来たのか、をテーマにインドネシアから沖縄まで手作りカヌーで航海しようという計画で、千葉の海岸で砂鉄を集め、それを鉄にして斧、鉈、チョウナなどの道具を作り、それらを手にインドネシアの島で材料の木を切り倒し、船大工の協力で丸木舟「繩文号」、そして現地のやり方で「パクール号」の2隻を作った。2009年4月13日、日本人4人、インドネシア人6人のクルーが2隻に分乗してスラウェシ島を出航、3年目の航海となる今年は5月11日朝、フィリピンの小島を出航した。台風の襲来を避けつつ無事バシー海峡を渡り、6月12日にはついにゴールの石垣島近くまで到達した。この会報が出る頃には3年がかりだった海の旅を無事終えているだろう。

医師である関野は震災の後、岩手県陸前高田の被災地に入り、13日間救急医療にあたつた。東日本大震災の発生と同時に地平線会議の仲間たちの多くは行動した。自然学校のネットワークを核として立ち上げた「RQ市民災害救援セントラル」や、モンベルの「アウトドア支援隊」などに参加し、ボランティア行動に入った者たちが少くない。私もRQの幹事のひとりとして後方支援にあたり、現地にもとんだ。

地平線会議では3、5、6の3カ月、恒例の報告会を「東日本大震災特別地平線報告会」として、さまざまな角度から被災の現場を語り合っている。三十数回という巨大津波に飲み込まれた海辺の町や学校、そして人々。東電福島原発の放射能汚染による強制退去。そういう日本で、冒険者たちはどう「いのち」の問題と向き合うのか。

2011年、探検と冒險の現在地。実は、舞台はヒマラヤや極地ではなく、日常、生きて行く風景の中にこそ、その真価が發揮されようとしているのではないか。そういう思いを強くした6月だった。

# トピックス 東日本大震災で475万円の義援金

## PTで使途検討へ

地震、津波、原発事故と未曾有の災害に見舞われた東日本。大震災の発生から3カ月たって、いまなお8000人が行方不明であり、9万人余が避難生活を強いられている。震災は進行中。復旧、復興は緒についたばかりである。

被災地、被災者に支援の思いを届けようと始まつた義援金募集中に、締め切りの6月10日までにおよそ475万円が寄せられた。

283人の会員個人と、支部、同好会、同期会、海外の登山協会など、およそ14のグループから送金があつた。

この大震災と放射能汚染の不安をどう受け止めているか。当会の会員で亡くなつた方はいかつたが、被害の大きかつた宮城、岩手、福島の各支部から、家族、兄弟を含むいくつかの被災報告が届いている。

以下、①会員だけが人は？ ②家族は？ ③家屋の被害は？ など

の問い合わせに対する宮城支部からの回答を紹介する。

質問① 会員受傷者 無し  
質問② 会員家族受傷者 無し  
質問③ 家屋被害

流失・全壊：田代 侃 会員  
浸水・半壊：中里政信 会員  
中塩一夫 会員  
柴崎 徹 会員

6月7日付け、林田事務局長からのメールである。情報漏れがあるかもしれないが、という注釈がついており、被災程度（全壊、半壊等）については、「罹災上の扱いを確認していないので、ほぼ確実というレベルでお答えします」とあつた。現在、避難所で生活している会員はいないという。

もうひとつ、都内に住む女性会員Nさんからのメールを紹介する。「私の実家は被災し、津波ですべてを（家も船も）失いました。震災後、何度も足を運んでいますが、最初は、実家のあつた場所がどこだつたか、まったく判らないほど

した。遠くに学校と山が見えるだけで、ここはどこだろう？ 不思議な場所でした。

復旧、復興と一口にいいますが、簡単なことではありません。「生きていよかつた……」から、いまは『これからどうして生きていこう』に変わっています。家を建てる、生活物資を買う、食べる、仕事する……。明日への希望を必死で探しています。一日も早く、みんなが希望を持つて、明日に向かって生きているんだ！ という実感をもつてほしい。そう願わずにはいられませんでした。（要旨）

義援金をどう使うか。6月8日の理事会では、支部や一般会員からの提案、提言も参考にして、さまざまな議論が交わされた。使途を大別すると ①全額を日本赤十字社に寄託する ②全額をJACらしい使い方（支援、激励企画、イベントなど）の実施に当てる ③日赤寄託とJAC独自企画に案分する ④主な被災地の支部に振り分け有効活用をゆだねる、の4通りである。

しかし、②以下の選択については企画内容、実施のタイミングなど

のためプロジェクトチーム(PT)を作ることを決め、理事会の承認を得た。PTの人選は6月18日の総会以降となる。

【寄金者名】（送金の到着順）  
・3月送金者

森武昭、山野井武夫、成川隆顕、三井嘉雄、中澤喜久郎、高木康雄、中島 隆、松井二夫、藤本慶光、堀井昌子、星埜由尚、本城淳子、瀬戸英隆、田辺 壽、足立孝也、望月重昭、渥見百合子、山本幸生、松村潤、北村義男、小山睦子、石橋正美、八木 功、柄沢洋城、柴田清康、篠崎 仁、中祖博司、影山英雄、大庭常生、羽賀克己、石田隆志、船田洋子、武田一生、古市進、照内 豊、鳥橋祥子、柏倉信義、長尾武彦、小松 忍、下川智子、川島由夫、平井順子、伊豫田滋雄、畠 雄司、高本 孝、小川武、中山 健、辻 和毅、西谷隆亘、横田昭夫、田中 紀、久保

田宣夫、青木巖、福原サチ子、  
井藤恵美子、穴田雪江、土合敦彦、  
淺川浩子、堀尾勝己、中野和夫、  
伊藤正毅、今福克保、中野八千代、  
平田健三、深川安明、大口瑛司、  
近藤宏、福田光子、松浦輝夫、  
山崎郁郎、小林力、中瀬龍男、  
大岡省二、絹川祥夫、三枝礼子、  
宮川美知子、野澤誠司、岡部紘、  
竹内宏規、鳴原一男、石原国利、  
笠原正明、篠原豊、渡辺正子、  
川合鉄一、大関保、小杉秀夫、  
小林貢、青木周子、澤村貴和、  
高田允克、吉田文子、高橋重之、  
谷口足樹、中村庸男、馬場勝嘉、  
小野寺正英、中川寛、林順子、  
是枝平八郎、小田知枝、須藤節子、  
宮崎紘一、佐藤知恵子、奈良千佐  
子、大塚博美、高橋努、神長幹雄、  
上島忠義、里美清子、大坪重遠、  
鈴木昭、本片山数雄、片野スミ子、  
吉田和夫、山本憲一、浅野武雄、  
中川美子、芳野菊子、休山会、長  
田義則、岡義雄、西澤忠、中原  
良材、名塚達夫、筧邦男、藤田  
靖二、加藤英彦、藤本三樹雄、富  
沢克禮、三野裕輝、今田明子、高  
畠拓生、脇田幸子、芦川昌子、大  
中政彦、塩沢厚、内藤芳夫、山  
川陽一、牧田洋子、山遊会、近藤

緑、坂本眞生、本多祐造、酒井広、  
中山茂樹、佐藤晴夫、三好まき子、  
納見明徳、小林京子、山田英一、  
山村孝夫、金山俊昭、加藤春男、  
増田千恵子、阿部慎一、清家順子、  
飯野やす子、笠原正明、宗實二郎、  
宗實慶子、寺西伸子、赤羽昭夫、  
岡田陽子、山田武史、山崎幸和、  
武田幸男、熊田宗次、高井延幸、  
佐藤允信、吉田紘臣、長谷川敦子、  
赤井守、大木淑子、松田雄一  
・4月送金者

菊池修身、川俣俊一、村川八重子、  
渡邊玉枝、染谷美佐子、津田美也  
・5月、6月送金者

小野勝昭

山田信明、石井仁、繩田さかえ、  
大谷城、酒井省二、宮崎幸司、  
辻和雄、清藤金男、田中昌二郎、  
相馬務、紫蘭会、梶田民雄、南  
川陸夫、笠原佐和子、荒井真二、  
芳村宗雄、小清水敏昌、中川博人、  
松岡栄一、武内喜代子、本望英紀、  
新妻徹、蓬田三枝子、小川務

**義援金をありがとうございました**

**会長 尾上 昇**

今度の東日本大震災に際し、会員の皆さまに義援金の募金をお願いしましたところ、別掲の通り、多数の会員の皆さまから多額のご芳志を賜りました。衷心よりお礼申し上げます。

被災されました皆さまの一時も早い集まつた淨財でございますが、現在プロジェクトチームを立ち上げ、その

郎、田中昭男、平位剛、長清幸子、  
滝登等、北九州支部、近藤育代、  
稻垣正憲、遠藤京子、平林克敏、  
静岡支部、宮崎支部、諏訪肇、  
関口興洋、清水弘子、原山恵津子、  
林桂子、蓮實淳夫、富山支部、  
梨羽時春、吉村健児、田井具世、  
鈴木貞信、大西攻、森下雅幸、  
椋本逸雄、熊本支部、山陰支部、  
伊藤久次郎、渡辺誠、浜地克郎、  
奥井清、徳島豊子、大野力弥、  
濱野吉生、(中華民国)彰化県登  
山協会、(同)逆溪協会、贊田美江、  
小野勝昭

・5月、6月送金者

山田信明、石井仁、繩田さかえ、  
大谷城、酒井省二、宮崎幸司、  
辻和雄、清藤金男、田中昌二郎、  
相馬務、紫蘭会、梶田民雄、南  
川陸夫、笠原佐和子、荒井真二、  
芳村宗雄、小清水敏昌、中川博人、  
松岡栄一、武内喜代子、本望英紀、  
新妻徹、蓬田三枝子、小川務

\*この義援金を日本赤十字社に寄付した場合、確定申告で寄付金控除の対象となります。ご希望の方は事務局まで郵便かファックスでお知らせください。

\*4月号の『山』エール欄に紹介したほかにも、韓国山岳会(元老会代表:孫慶錫JAC名譽会員)など、各国の山岳会からお見舞いと激励をいたいたことを記し、感謝の意を表します。

澤登等、北九州支部、近藤育代、稻垣正憲、遠藤京子、平林克敏、静岡支部、宮崎支部、諏訪肇、関口興洋、清水弘子、原山恵津子、林桂子、蓮實淳夫、富山支部、梨羽時春、吉村健児、田井具世、鈴木貞信、大西攻、森下雅幸、椋本逸雄、熊本支部、山陰支部、伊藤久次郎、渡辺誠、浜地克郎、奥井清、徳島豊子、大野力弥、濱野吉生、(中華民国)彰化県登山協会、(同)逆溪協会、贊田美江、小野勝昭

・5月、6月送金者

山田信明、石井仁、繩田さかえ、大谷城、酒井省二、宮崎幸司、辻和雄、清藤金男、田中昌二郎、相馬務、紫蘭会、梶田民雄、南川陸夫、笠原佐和子、荒井真二、芳村宗雄、小清水敏昌、中川博人、松岡栄一、武内喜代子、本望英紀、新妻徹、蓬田三枝子、小川務

\*4月号の『山』エール欄に紹介したほかにも、韓国山岳会(元老会代表:孫慶錫JAC名譽会員)など、各国の山岳会からお見舞いと激励をいたいたことを記し、感謝の意を表します。

有効な使途の検討に入らせていただいている。会員の皆様方からもアイデアを募っていますので、よろしくお願ひ申し上げます。

被災されました皆さまの一時も早いお元気の回復と被災地の復興を併せてお祈り申し上げます。

エキスペディション

## 「雨ニモマケズ」ダッドメイン東壁初登

長門敬明

ある程度覚悟はしていたのだが、エドガー南東壁へのアプローチは想像をはるかに超える悪さだつた。昨年、東壁を登つたカイル・デンプスターとブルース・ノーマンドの記録でその危険性は予想していたものの、谷の両側面に高く切り立つ土壁と、そこに危うげに挟まつた不安定な岩が、今にも（実際に目の前でも）崩れ落ちてくるというありさま。この

先<sup>2</sup>（<sup>3</sup>キロ）にわたつて逃げ道がなく、高い確率で落石に遭う可能性のある谷を、霧雨のなか進む蛮勇はわれわれにはなかつた。これ以上進むことは死を意味するとさえ直感していた。こうして一村文隆、増本亮、そして私・長門敬明のギリギリボーアズ隊は、当初の目的であるエドガー南東壁を断念せざるを得なかつた。

### ダッドメイン東壁へ

私たちが幸運だつたのは、高所順応中にエドガー南東壁の代替候補を見つけていたことだつた。

ダッドメイン（6380メートル）東壁。それは燕子沢の奥に美しく聳え立つ標高差約2000メートルあまりの壁だつた。

態勢を立て直し、悪天をやり

過ごしてダッドメインを目指したのは4月19日。BCを設営してから20日のことだつた。長いアプローチをこなし、燕子沢4100メートル地点（ABC）でアタックに備える。

4月20日。朝3時40分にABCを出発。ヘッドランプの明かりも必要なくなると、目の前に朝日に染まる黄金色の東壁が現われた。

近くで見ても、やはり美しく巨大な壁だつた。弱点と見た登路は、とても自然で無理のないきれいなラインだとあらためて感心する。

壁のほぼ中央にある顕著なルンゼをつめる。広い中央ルンゼでは、何度も小規模の雪崩が横をか

すめるが、雪崩の通り道を避けて壁の取付へ。標高約5100メートル地点でロープを結び、クライミングをスタート。雪が変化に富んでいたため停滯。

4月24日。晴れたが、雪が落ちて、岩の摂理が乏しいため、プロテクションはピトンかマイクロナットしか使えない。精神的にすり減らされるピッチが続いた。壁の中間にある長いナイフリッジを超えて、岩の陰に比較的快適そうなビバークサイトを作る。3分の1は宙に浮いたテントで体育座りになつてシュラフに包まつた。

4月21日。踏み固まらない雪を崩しながらのクライミング。できるだけ硬い氷を求めて進んだ。しかし昨日までの青空は消え、いつのまにか雪が本格的になる。チリ雪崩のなかを進むしかないと寒さに耐えながら登りつけ、22時10分ごろ、またもや不安定な腰掛けビバーク（5950メートル）。靴を脱げないのでそのままシュラフに入る。

4月22日。降雪が激しくなつているように見えたがクライミングを再開。この壁の傾斜ならチリ雪崩ほどで、それ以上拡大はないだろうと判断する。着実に高度を稼いで頂稜に達する手前（6100メートル）に到達し、セラック

4月23日。雪崩の危険が出てきたため停滯。

4月24日。晴れたが、雪が落ちて、岩の摂理が乏しいため、プロテクションはピトンかマイクロナットしか使えない。精神的にすり減らされるピッチが続いた。壁の中間にある長いナイフリッジを超えて、岩の陰に比較的快適そうなビバークサイトを作る。3分の1は宙に浮いたテントで体育座りになつてシュラフに包まつた。

4月21日。踏み固まらない雪を崩しながらのクライミング。できるだけ硬い氷を求めて進んだ。しかし昨日までの青空は消え、いつのまにか雪が本格的になる。チリ雪崩のなかを進むしかないと寒さに耐えながら登りつけ、22時10分ごろ、またもや不安定な腰掛けビバーク（5950メートル）。靴を脱げないのでそのままシュラフに入る。

4月22日。降雪が激しくなつているように見えたがクライミングを再開。この壁の傾斜ならチリ雪崩ほどで、それ以上拡大はないだろうと判断する。着実に高度を稼いで頂稜に達する手前（6100メートル）に到達し、セラック

なお、今回の登山は日本山岳会海外登山基金の助成を受けて実施いたしました。ありがとうございました。



ダッドメイン東壁、4月25日登頂

# 海外登山事情

## ニュージーランド山岳会の名誉会員に

中村 保

まさに「サプライズ」だった。ニュージーランド山岳会から招聘により、2月の大地震の復興最中にあるクライストチャーチで、5月20日に「最後の辺境——チベットのアルプス」の講演をした。講演が終わって名誉会員認証を告げられたのだ。事前に知られてなかつたのでとても驚き、感謝した。



160名を前に講演を行なう中村保氏。右はキャンメル会長

これで、英國アルパインクラブ、アメリカ山岳会、ヒマラヤンクラブ、ボーランド山岳会、日本山岳会と、6つの世界の山岳会の名誉会員にしていただいた。登山家として、このうえない光栄である。

企業戦士として、波乱万丈のプロジェクトで6年間苦闘したニュージーランドは、私の第二の故郷である。それだけに、感慨もひとしおであった。

クライストチャーチでは、ニュージーランド山岳会会長ピーターキャンメルさんはじめ、皆さまに大いに歓待を受けた。クライス

トチャーチでの講演には、160名を超える方々が来場してくれた。切符はすべて売り切れたという。若い登山家の姿も多かつた。1953年、ヒラリーとともにエベレスト隊のメンバーであり、1955年にカンチエンジュンガにジョージ・バンドとともに初登頂したノーマン・ハーディーさんも来られ、親しく接することができた。嬉しい出会いだった。

日本山岳会のクラブ・タイと、100周年記念の冊子をきしある。

エドモンド・ヒラリーはなぜ名誉会員ではないのかと訊いたところ、ニュージーランド山岳会会員は名誉会員にしないという規約があり、代わりに終身会員にしているとのことだった。ノーマン・ハーディーさんも終身会員である。

ちなみに、ニュージーランド山岳会の歴史は日本山岳会より古く、創立は1897年である。現在の会員は北島1500人、南島1550人、計3050人。コ

ランド登山ガイドブック(全9巻)をいただいたので、日本山岳会の図書室に寄贈した。著名な南極探検家で写真家のコリン・モンティースさんからは素晴らしい写真集、目を洗われるような美しい新刊『南極——沈黙の土地』をいただきた。

今回の名誉会員認証は、存命会員では7人目である。登山家ではジョージ・バンドの名があり、植物学者、自然環境保護に貢献している方がいる。物故名誉会員はN·E·オーデル、エリック・シpton、ジョン・ハント、チャーレス・エヴァンス、テンジン・ノルゲイなど13名である。

エドモンド・ヒラリーはなぜ名誉会員ではないのかと訊いたところ、ニュージーランド山岳会会員は名誉会員にしないという規約があり、代わりに終身会員にしているとのことだった。ノーマン・ハーディーさんも終身会員である。

ミッティー・メンバーは25名、会費は7800円である。人口400万人の国に3000人もの会員がいて、年齢構成は偏っていない。英國の伝統を継ぐ正統的な登山文化がしつかり根づいている。パブリシティーは多彩である。年間のジャーナル以外に、『ザ・クライマー』という立派な季刊の山岳雑誌を出版している。美しいカレンダーも作っている。

会長のピーターキャンメルさんは50歳と若く、活動そのものにも活力が感じられた。

ヒストリー

# 外国人による登山150年——オールコックからメスナーまで②

上村信太郎

## お雇い外国人の登山

明治新政府に招聘されたお雇い外国人のなかには、仕事がら山野を跋涉する者、趣味として登山する者、旅行の一部としての山歩きをする者も少なくなかつた。

アメリカ人のウイリアム・エリオット・グリフィスは、明治<sup>3</sup>(1870)年に福井藩の招きで来日。

お雇い教師として教育に当たる合間に、白山に登つて標高を測定している。

大阪造幣寮のイギリス人冶金技師ウイリアム・ガウランドは、明治<sup>5</sup>(1872)年に来日。「日本アルプス」の命名者で、槍ヶ岳に登頂した最初の外国人でもある。イギリス人バジル・ホオル・チエンバレンは、明治<sup>6</sup>(1873)年に23歳で来日。以降滞日40年。東京帝大教授を歴任。ウェ斯顿も読んだとされる外国人向けの英字図書『日本旅行案内』改定第3版から<sup>9</sup>版の編集を担当した。

日本近代医学の父とされ、明治

天皇の侍医でもあつたドイツ人工ルヴィン・フォン・ベルツは、明治<sup>9</sup>(1876)年に来日。休暇を利用して関東、東北の山々を登つてている。

## 相次ぐ著名な探検家の来日

明治から昭和のはじめにかけて、探検史上の著名な探検家が何人も来日した。

北極海からベーリング海峡を越える北東航路の開拓に成功したスウェーデンのニ尔斯・A・E・ノルデンショルド一行が、明治<sup>12</sup>(1879)年秋、ヴェガ号で横浜に入港。約2カ月滞在。その間にノルデンショルドは、隊員2人、通訳、コックだけを伴い浅間山に登山している。

樓蘭の遺跡発見など、中央アジア研究で功績を残したスウェーデンの探検家スヴェン・ヘディングが明治<sup>41</sup>(1908)年に来日。各地で講演を行なつていて。

エンデュアランス号が沈没しても読んだとされる外国人向けの英字図書『日本旅行案内』改定第3版から<sup>9</sup>版の編集を担当した。

日本近代医学の父とされ、明治

28人が奇跡的な生還を果たしたシヤクルトン隊の隊員で、倉庫管理係トマス・H・オードリーズが、大正<sup>11</sup>(1922)年に日本海軍の招きで来日。霞ヶ浦海軍飛行場で落下傘の降下指導。その後、教壇に立つ。教え子の一人に、南極と縁の深い村山雅美(故人・JAC名譽会員)がいる。

南極と北極の探検で歴史に名を刻み「探検王」とよばれたノルウェーのロアルト・E・G・アムンゼンが、報知新聞社の招きで昭和<sup>2</sup>(1927)年に来日。各地で講演したほか、天皇に拝謁している。

## 鳳凰山地蔵仏の登攀

鳳凰三山の地蔵岳のオベリスクは、別名を地蔵仏といふ。この地蔵仏は、イギリス人宣教師ウォルター・ウェ斯顿が明治<sup>37</sup>(1904)年に単独初登攀した。

ウェ斯顿の初来日はこれより16年前。3度訪日して多くの外国人初登頂の記録を樹立。日本における近代登山の父と呼ばれる。地蔵仏登攀はイギリス人の目標となつた。

外国人による地蔵仏の第2登攀は大正<sup>6</sup>(1917)年、神戸マウンテンゴート・クラブ(M.G.K.)の

エンデュアランス号が沈没し、日本スキーの父とされるのが、オーストリア・ハンガリー帝国の駐日陸軍参謀少佐として、明治<sup>43</sup>で南極大陸横断に失敗しながらも、

(1910)年に来日したテオドール・エドラー・フォン・レルヒだ。翌年、新潟県高田(上越市)の陸軍第13師団歩兵第58聯隊に赴任。将校に一本杖スキー技術を指導した。これが本邦のスキー発祥とされている。

レルヒ来日から20年後、2本杖スキーのアルベルグ・スキーの名手オーストリアのハンネス・シユナイダーが来日。招聘したのは成城学園と玉川学園。各地でスキー講習会を催し、大歓迎を受けた。その後、全国的なスキーブームが到来した。

第二次大戦後は、冬季オリンピック金メダリストで昨年亡くなつたトニー・ザイラーが来日、多くの人々が記憶していると思う。あまり知られていないが、マカルー登山隊を率いたジャン・フランコが、昭和45(1970)年にスキー指導のため来日している。フランス国立登山スキー学校(ENSA)の校長でもある。苗場スキー場ほかで講習会を実施した。

### 外国人滞日中の山岳遭難など

来日中の事故や天災、山岳遭難などにより不慮の死を遂げた外国人人もいる。

『日本旅行案内』改訂版、第3版以降の編集を、チエンバレンと行なったイギリス人のウイリアム・ベンジャミン・メイスンは、電信技士として22歳で来日、70歳で日本で亡くなつた。死因は不運にも、関東大震災により横浜グランドホテルにおける圧死であつた。

独逸製鋼勤務のドイツ人技師、ゲオルグ・アイディング夫妻が奥日光で消息を絶つたのは昭和8(1933)年正月のこと。日光湯元のホテルをカメラひとつ軽装で山スキーに出たまま戻らず、2日後になつて遭難が判明。夫妻はコースに迷い、アイディングが菅沼に滑落して凍死。夫人がひとりで、未知の雪中を6時間かけて歩き続けて人家に急報したもの。捜索が遅れた理由は、夫妻が宿泊したホテル側が騒ぎになるのを怖れたからだつた。

ルフトハンザドイツ航空のクラウス・ハインリヒ機長とハンス・ゲルハルト・ミスラー整備士が、昭和51(1976)年の晚秋、富士山八合目付近において凍死。機長は次のフライトまでの待機中に富士登山を計画。遭難した2人とも驚くほどの軽装であつた。(続く)

北海道支部は、日本山岳会100周年記念事業の一環として行なわれた中央分水嶺(宗谷岬から白神岬の1133<sup>キロ</sup>)を踏査した。そして現在、それに続くオホーツク分水嶺(三国山から知床岬の350<sup>キロ</sup>)を踏査中である。

2007年5月からスタートしたが、同年11月に発生した上ホロカメツトク雪崩事故により4名の岳友を失い、中断をしていた。

そして、今年の2月、支部再生の威信をかけて再開にこぎつけた。

オホーツク分水嶺は、北海道の中央部の東大雪山系から発して阿寒丘陵地帯、屈斜路湖摩周湖外輪、斜里岳を経て知床山系へと繋がる。分水嶺の中に登山道があるのは、羅臼岳から東岳までの11<sup>キロ</sup>と藻琴

## 北海道支部 東へ350<sup>キロ</sup> オホーツク分水嶺踏査中!



だより

全国各地の支部から、  
それぞれの活動状況を、  
北から南へとリポート  
します。



雌阿寒岳(右)とフッペシ岳(左)を望みながら分水嶺を行く(2011年2月)

て組織を改変、困難さを伴う知床山系へ、手堅い陣容で踏査に入ることとした。

北海道支部結成50周年の2015年春までに、知床岬到達を目指している。

(京極紘二)

## 福島支部

### 震災後初の支部行事は安達太良の清掃登山

東日本大震災で当支部に被災者はいない。けが人もいなかった。福島第一原発の事故と放射能不安の3カ月だが、避難地域に住んでいる会員もいなかつた。被災者、避難生活者には申しわけないが、さいわい、というべきだろう。

6月5日、震災後初めての支部行事「清掃登山」を安達太良山で行なった。10人が参加した。山道は以前とほとんど変わらなかつた。本部から届いたばかりの「山の日」のパンフレット(安全編)を登山者ら数十人に手渡した。

吾妻山のほうでは、落石や木の枝などで道がふさがれ、歩きにくい箇所があると聞いた。

(大谷司)

## 東九州支部 韓国山岳会蔚山支部との交流登山

東九州支部の韓国山岳会蔚山支部との交流登山は、今年は韓国本土最高峰の智異山で行なわれた。

この登山隊派遣のスタートは平成17(2005)年にさかのぼる。きっかけはその年の10月、大分市を訪れていた韓国蔚山広域市の韓日親善訪問団のなかに、韓国山岳会蔚山支部会員が数人いた。一行が市役所を訪問した際、「日本の山岳クラブのメンバーと交流したい」という希望が出された。これを受けて市から東九

州支部に連絡があり、急遽メンバーや集めての交流会を持つこととなつた。そのなかで「今後は相互に訪問しあつて交流登山を行なう」という申し合わせが成立したのである。

その翌年、蔚山支部が大分を訪れ、九重連山で交流登山を行なつた。翌年は、当方から韓国の嶺南アルプスを訪れている。以降、交互に訪問交流登山を続けているもので、昨年は韓国からの訪日団を霧島山に迎えて実施している。7度目の交流となる今年は、当方が3度目の韓国訪問の順番だ。

今年、韓国訪問に参加した交流登山隊(隊長・加藤英彦支部長)は12名。一行は5月1日、博多港から高速船で釜山へ渡り、蔚山支部の出迎えを受け、車で智異山山麓の中山里へ移動。その夜は、山麓のペンションで交流・交歓会を行なつた。

2日、中山里渓谷経由で登り、主稜線上にあるチャントモクの山小屋泊まり。

3日朝、智異山連峰最高峰の天王峰(1915メートル)へ登頂した。下山は法界寺経由で、韓国の登山のメッカと言われるこの山域が、



智異山の主峰・天王峰山頂にて

また一方では古くから山岳信仰の聖地であつたことを知ることができた。その後、車で蔚山へ移動。南山へ登つた。南山は「露天博物館」と呼ばれ、山全体が世界歴史遺産に指定されている。山のいたるところに点在する国宝級の文化財を見物しながら、山頂の金鰲山(468メートル)などに登つた。

5日間とも好天に恵まれた。今回も、一行は韓国の山仲間たちの実に真心のこもつた手厚いもてなしに感激しながら、5日、福岡港へ帰国した。

(飯田勝之)

おしたが、事前の申込みの中に毎年申し込みのある被災地域の会員の名前を見るにつけ、その苦労を思うと心が痛んだ。

さて当日、200冊の本がルームの104号室に並んだ。昨年は600冊の出品があり、てんてこ舞いをしたことを考えると今年はゆつくりと本を見ながら抽選をすることができたのは幸いだ。

図書委員会

今年の図書交換会は3月19日に開催を予定していた。ところが東日本大震災が起り、「開催日未定で延期」とすることに決定急遽ホームページなどで案内をしたのだが徹底できず、当日に延期を知らずにルームに足を運

安川茂雄著『近代日本登山史』と渡辺公平著『山は満員』が13名からの申し込みでいちばん人気。特にこの2冊は、著書の署名があることが評判につながった。『近代日本登山史』はもともと人気があるうえにサイン本だ。『山は満員』の方は、扉に著者の手によるイラストが描かれている。なるほど「本好き」なら、手元におきたいと思う1冊だ。

この2冊と競ったのが、上田茂春著『山の本』——収集の楽し

しかし例年のことだが、今回  
も抽選の倍率が高く（ちなみに  
私は8冊の抽選に参加し、当た  
つたのは1冊のみ）、ほとんどの  
本が複数の申し込みで抽選にな  
った。そして最終的には6冊を  
残してすべての本を販売するこ  
とができた。

さて今年の人気本を紹介しよ  
う。

# 活 動 報 告



今年の人気本 左上より「山は満昌」「近代日本登山史」「雪原の足あと」「山の本」「木屋風信」

入札本6冊にも値がついた。坂本直行著『雪原の足あと』限定本には6名からの入札があつた。この本は羊皮で製本され、1冊ごとに著者の直筆の植物画が添えられている。数年前に出品された本の絵は「はまなす」だつたよう記憶するが、今回の絵は緑色が美しい「みやまたたび」。坂本直行の本の人気は健在だ。

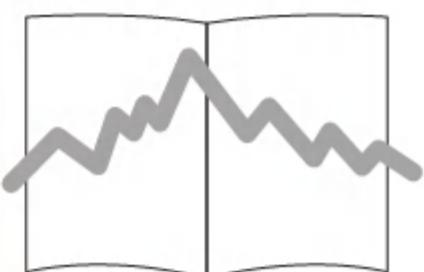
み」と岡茂雄著「本屋風情」の2冊。ともに12名の申し込みで肩を並べた。偶然とはいえ、この2冊はともに古書愛好家の

『霧の山稜』が3冊出品された。表紙はみな同じだが値段は200円、1500円、1000円と3冊とも異なる。なぜか。それは、昭和31年に朋文堂から出た初版の美本、同じく多少汚れのある本、昭和46年に二見書房から出た復刻版という違いがあるからだ。本を並べてみれば100円の本がいちばんきれい(もちろんいちばん新しいからでもある)なのに、古書の世界は不思議な世界もある。

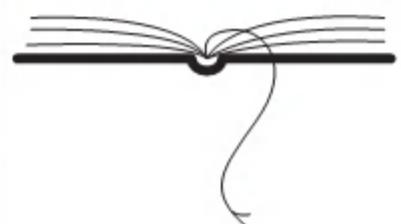
への熱い思いが伝わってくる。  
被災地でも本への渴望が語られるようになつたという。本棚に眠る本たちも、いつかどこかで人の心を潤すかもしれない。そんな願いをこめて、今年度も図書交換会を開催する予定。まだ終わつたばかりで作業は途中だが、この夏の終わりにはまた次回の出品本の募集を開始する予定だ。

への熱い思いが伝わってくる。  
被災地でも本への渴望が語られるようになつたという。本棚に眠る本たちも、いつかどこかで人の心を潤すかもしれない。そんな願いをこめて、今年度も図書交換会を開催する予定。まだ終わつたばかりで作業は途中だが、この夏の終わりにはまた次回の出品本の募集を開始する予定だ。

(二) 好まさ子



## 図書紹介



ラザフォード・オールコック・著  
山本秀峰・編訳  
『富士登山と熱海の硫黄温泉訪問』



旅行に出かけたのは1860年9月、着任1年後のこと。外交官に保証されていた日本国内の自由旅行の権利を実行してみたというのが、その理由。外国人には未踏だつた富士山に対する個人的関心もあつたようだ。だが、たとえ外交官でも外国人には容易でなかつた内地旅行を企てた主たる目的は、漸く開国した「神秘の国」日本についていまだ不足していた「精神的、社会的、道徳上の、そして最も興味深い政治的諸問題」の解明に必要なデータを提供することであつたろう。

当時の西欧諸国がそれを必要としていたのは、日本に対してどのような外交上の関係を結ぶべきか考慮中だつたからだ。要するに、彼らは、アジア・アフリカに対しても植民化の思惑をひめた目をひかれていた。オールコックは、日々の実情を視察して習俗、産業、ケッチ画、関連年表なども参考資料として収めてある。

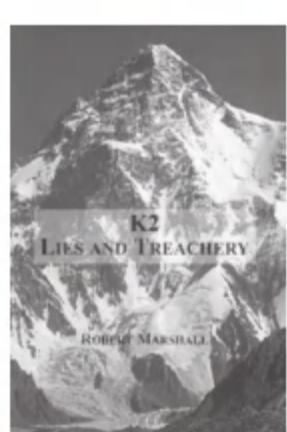
1859年にイギリス総領事として来日、その後初代駐日公使をつとめたラザフォード・オールコックが、1861年に英國王立地理学協会雑誌に寄せた、富士登山と熱海訪問の旅行記録の翻訳。「はじめに」に記されているように、この内容は1863年刊行の『大君の都』に増補・修正を加えて収録されている（岩波文庫版は現在品切れ）。『大君の都』に挿入の図版のほか、オールコック滞在当時の新聞の関連記事や図版、スケッチ画、関連年表なども参考資料として収めてある。

日本に対する関心の中心が、日本に蓄えられたいまだ手つかずの「おおいなる物質的富」をめぐる通商問題だつたことからも、経済学的な視点からの考察が加えられ、結論的に「大きな貿易を支援し、育てる可能性」を予測している。伝統的な学の系譜では、道德哲学に包摂されていた経済部門がアダム・スミスの『国富論』以降分離し、イギリスで経済学は国家の運営にかかる学として認知されたわけだ。だが、その研究対象にされた日本にとつてみれば、そうした事情は当時の段階ではいまだ理解の及ばぬところであつたろう。

総じて、日本に向けられたオールコックの目は、たしかに公平で好意さえ含むものに思える。しかし、それは「西から東へ地球上をめぐる文明とキリスト教のつながり」に欠けた地域、すなわち未開の点で、たとえば『大君の都』では日本人を指すのにしばしば「原住民(native)」という語が使われている。この翻訳ではすべて「日本人」になつてているが、原文ではどうだろうか。

『大君の都』のような一般の人々ではなく、地理学協会という大英帝国の国家政策の一翼を担う特別な読者を想定していることで、当時のイギリスの国家的な関心や意図が直截に読み取れる記述がコンパクトにまとめられている。開国期日本と西欧諸国との関係、日本文化に対するアプローチ、さらには西洋人から見た日本の登山やさまざまなエピソードなど、興味深い内容になつていて。このような貴重な資料が翻訳で読めるようになつたことは、有意義なことと評価したい。

(飯田年穂)



Robert Marshall・著  
『K2 Lies and Treachery』

1954年、世界で最も困難と

いわれていたK2にイタリア隊が初登頂した。万全の準備と組織力、洗練された隊員の努力の成果である。だがイタリア隊は、登山隊の団結した精神を重んじて、登頂した2人の隊員の名前を長い間公表しなかつた。学生時代に発売された『K2登頂』(朋文堂 1956年)をヒマラヤ登山の真髓に触れたようには感激して読んだものだ。しかし、50年後、初登頂の裏に許しがたい悪辣・卑劣な行為が隠されていたことが明かされる。

初登頂の前日、猛吹雪のなかをボナッティと、フンザのハイポーター、マーディは、先行するコンパニヨーニたちを支援するため酸素ボンベなどの重荷を担いでC9に向かった。しかし、コンパニヨーニたちは、C9を約束の場所でなく急な岩と氷の斜面を登りきり、ボナッティたちが夕方までにたどり着けないような岩棚の上に設営していた。猛吹雪のなかでツエルトもなしのビバークを強いられた2人は、ビバーク地点に酸素ボンベを置いて下山した。ボナッティは奇跡的に無傷であったが、マーディは重症の凍傷を負っていた。隊長A・デジオの正式報告書に、

コンパニヨーニは「頂上の手前で酸素ボンベの酸素を使い切り、その後2時間空の酸素ボンベを背負つて登頂した。酸素が不足したのは、抜け駆けして頂上を目指していたボナッティが、ビバークの晩に酸素を吸つたからだ」と報告している。そこから「嘘」が始まる。

ボナッティは、酸素マスクを持参しておらず酸素を吸うことができなかつたはずだ。数本の手指と全足指に凍傷を負つたマーディの状況聴取も行なわれていない。ガイド出身のボナッティと、現地人のマーディに対する偏見が垣間見られる。

1964年、K2初登頂10周年に『People's of New Sunday Gazette』が、「ボナッティがどのようにしてコンパニヨーニたちに先行しようとしたか、カラチの公使館としてマーディがボナッティと共に登頂を企てていた」などと書き立てた。これに対し1966年、ボナッティは名誉毀損の訴えを行なつた。ボナッティは、その後も一人でイタリア山岳会相手に闘つていた。ところが1986年、幸運なことに、山にはまったく登つたことのないオーストラリアの外科医ロバート・マーシャルが、この訴訟に

関心を抱き、ボナッティの2冊の自叙伝的な本を英訳した。著者は、酸素ボンベの容量から酸素吸入時間割り出し、頂上でコンパニヨーニとラチエデリの写真を詳細に分析。そして、この2人の酸素が登頂のはるか手前でなくなつたという主張や、C9の位置やアタックへの出発時間で嘘を言つていることを突きつけた。

図書受入報告 (2011年5月)					
著者	書名	ページ/サイズ	出版元	刊行年	寄贈/購入別
田部井淳子監修	田部井淳子の楽しい! 山登り入門	176p / 24cm	PHP研究所	2011	出版社寄贈
信州大山岳科学総合研・他(編)	山岳を科学する2011——その最前線	37p / 30cm	市立大町山岳博物館	2011	発行者寄贈
横浜国立大学山の会(編)	横浜国立大学山の会会報——発足50周年を経て第9号	111p / 26cm	横浜国立大学山の会	2011	発行者寄贈
松尾良彦(著)福岡登高会(編)	九州登山史年表——ドキュメント 九州の<山と人>	185p / 26cm	松尾良彦(私家版)	2011	著者寄贈
岩崎元郎	山で失敗しない10の鉄則 (文春新書 No.807)	220p / 18cm	文藝春秋	2011	著者寄贈
紫蘭会(編著)	紫蘭の四季: 紫蘭会35周年記念号	139p / 26cm	紫蘭会	2011	発行者寄贈
下關山岳會(編)	稜線 (No.6) ——下關山岳會創立80周年記念号	258p / 26cm	下關山岳會	2010	発行者寄贈
J・ガイガー(著)伊豆原弓(訳)	奇跡の生還へ導く人——極限状況の「サードマン現象」	255p / 20cm	新潮社	2010	出版社寄贈
岩橋崇至	燕岳 (岩橋崇至写真集) ——四季へのいざない	110p / 22cm	毎日新聞社	2011	著者寄贈
長沢敬(訳)	ケンバーマンの明治10年山陰紀行(全訳)	215p / 21cm	今井出版	2010	訳者寄贈
田中茂(編)	丹沢登山百年の歩み——近代登山の夜明けから今へ	118p / 26cm	田中茂(私家版)	2011	編者寄贈
吉岡章	関西起点 沢登りルート100	255p / 21cm	山と溪谷社	2011	出版社寄贈
猪熊隆之	山岳気象大全	320p / 21cm	山と溪谷社	2011	出版社寄贈
高澤光雄	北海道の登山史探求 (北方新書 No.014)	252p / 17cm	北海道出版企画センター	2011	著者寄贈

(南井英弘)



# 追

OBITUARY

# 悼



## 杉山都子さんを偲ぶ

早川瑠璃子

切に生きるわネ」と、言葉を返してくれたのである。

都子さんと私は、俗にいう「ウマが合う」そんなつき合いに終始

したようだ。いつ頃からそんな間柄になつたのか定かではないが、日本山岳会が現在の場所（市ヶ谷）に落ち着いた昭和53年頃からかもしれない。

大先輩、元気一杯の中先輩、そして入会して間もない方たちが、大盛りの料理をいただきながら、ビールや酒を飲む楽しさ。そのうち、心地よい酔いに誘われた大先輩たちが、声をかけてくださる。日頃、畏敬の想い、本でしか会えない先輩方と親しく話が出来た。時には、山行の話がまとまつたりもする。「美味しいネ」、「うまいなあ」。会場の皆さんからお褒めの言葉を頂戴した婦人懇談会の面々は、次回はもつと美味しい物をと、張りきつた。

2月の末頃、彼女と最後に交わした電話での言葉を思い返したのである。私が、「都子さん、今まで病気に負けなかつた自分の気を大切にして、一日一日を大事に過ごしてね」と言うと、「毎日を大

山都子さんが亡くなられた。杉山家から通知の葉書をいただいた私は、心中で、きっと静かに旅立たれたであろうと思つた。

去る4月6日、病氣療養中の杉山都子さんが亡くなられた。杉山

家から通知の葉書をいただいた私は、心中で、きっと静かに旅立たれたであろうと思つた。

### 杉山都子 (すぎやま・いくこ)

1972年4月～1999年1月までの27年間、日本山岳会事務局職員として勤務。この間、会長は9代、理事、評議員の数は延べ300人ほどに及ぶ。日本山岳会をよく知る一人であり、窓口として、多くの会員に慕われた。

1934年生まれ

1972年4月 日本山岳会事務局職員として勤務  
1999年1月 退職  
2000年6月 日本山岳会入会(会員番号13288)  
(紹介者: 西村政晃、村井龍一)  
2011年4月 病気のため逝去。享年77

今より少し広かつたルームで、毎年欠かさず続けられていた。まだ若く元気な私たちは、皆で知恵をしぶり、手作りの料理を持ち寄つてテーブル一杯に並べた。当時は、食器も台所道具も揃つていたので、充分にこのパーティーを盛り上げることが出来た。今考えると、横の繋がりでなく、縦の繋がりの心を通わせる場でもあつたような気がするのである。

都子さんが平成11年1月に退職後、児玉茂さんが、会報『山』649号に「杉山さんの時代」と題して書いておられる。それによれば、27年間も事務局を支えられたのである。都子さんの在任された頃の事務局には、まだまだ手作りのアットホーム的な暖かい雰囲気がいつも漂つっていた。皆、「こんにちは」と、我が家のようにすかずかと入り、菓子などを持ち込んで、ルームでお茶をしたものだ。

今想うと、悪気なく、会員たちは職務妨害をしていたのかもしれません。都子さんが亡くなつた後、西村政晃さんから葉書をいただいた。その文面に「杉山さんは優しく賢い人でした」とあつた。私も本当に同感であります。

合掌

# 会 務 報 告

平成23年度第2回(5月度)理事 会議事録	
日時 平成23年5月11日 18時30分より21時まで	場所 日本山岳会 会議室
【出席者】 尾上会長、神崎・宮崎・藤本各副会長、成川・岡部各常務理事、太田・堀井・相馬・山川・野沢・中山・谷川・永田・萩原各理事、深川・平井各監事、近藤・酒井・森各常任評議員	

開会にあたり尾上会長から、「昨年度の決算は厳しい結果になりました。本年度以降の財務運営について抜本的対策を考えたい」との発言があり、また東日本大震災の義援金募金については会員の皆様から多くのご厚志が寄せられていることについて謝意が述べられた。

(2) 「特定資産の積立金の振替」に関して、特定資産である積立金

3・特定資産である基金・積立金の整理 (岡部)  
 (1) 「基金および積立金等に関する細則」について、4月度の理事会案の一部訂正した内容の説明が  
 4月度の理事会で改定案について若干の意見などがあり、再検討し成案を得ていくことになつていてが、それらについてプロジェクトチームでの再検討結果が説明され、了承された。(承認)

2・平成22年度事業報告 (宮崎)  
 平成22年度事業報告(案)および会員動向についての説明があり、一部修正・追加された。(承認)

5・平成23年度会費滞納除籍対象者 (宮崎)  
 4月現在の2年間会費未納者のリストが示され、今年度中に会費の納入がない場合は除籍とする旨の報告があつた。(承認)

6・平成23・24年度理事、監事、評議員候補について (会長)  
 理事、監事、評議員候補者についての常務理事会で整理した案が提示された。なお、会長および副会長については、会長経験者・前副会長の意見を聞いた上、理事候補者から評議員会が推薦し、監事については評議員会が推薦する。(承認)

8・「安全のための知識と技術」後援と協力依頼 (宮崎)  
 社団法人日本山岳ガイド協会から、6月から11月にかけて全国8都市で開催する公開講座「安全のための知識と技術」(聴講無料)への後援協力依頼があつた。(承認)

7・支部長交代、支部規約変更 (宮崎)

に対し、細則・決算のとおり整理する基本的な考え方について説明が行なわれた。(承認)

4・平成22年度収支決算書 (案) (岡部)  
 平成22年度収支決算書(案)について、厳しい決算になつたとの説明があつた。

1・新法人への定款変更案 (継続審議) (宮崎)  
 4月度の理事会で改定案について若干の意見などがあり、再検討し成案を得ていくことになつていてが、それらについてプロジェクトチームでの再検討結果が説明され、了承された。(承認)

5・平成23年度会費滞納除籍対象者 (宮崎)  
 4月現在の2年間会費未納者のリストが示され、今年度中に会費の納入がない場合は除籍とする旨の報告があつた。(承認)

6・平成23・24年度理事、監事、評議員候補について (会長)  
 理事、監事、評議員候補者についての常務理事会で整理した案が提示された。なお、会長および副会長については、会長経験者・前副会長の意見を聞いた上、理事候補者から評議員会が推薦し、監事については評議員会が推薦する。(承認)

(1) 富山支部・支部規約変更 (支部会費) なお支部長交代(新支部長・遠藤靖彦 No.6653、前支部長・古屋学而)は4月度理事会で承認済み。

(3) 広島支部・支部規約変更 (支部会費)

(4) 山形支部・支部長交代 (新支部長・渡辺 誠 No.12190、前支部長・佐藤淳志)

(5) 東九州支部・支部長交代 (新支部長・加藤英彦 No.8765、前支部長・梅木秀徳)

(6) 京都支部・支部長交代 (新支部長・田中昌一郎 No.12819、前支部長・塚本珪一)

(7) 北九州支部・支部長交代 (新支部長・伊藤久次郎 No.13499、前支部長・大庭常生) (承認)

**9・ロゴマーク使用許可願い(宮崎)**  
福島支部から、新たに発行する  
支部報へのロゴマーク使用願いが  
5月10日付であつた。(承認)

#### 10・三國学生交流登山招請(宮崎)

韓国山岳会から、4月28日付で  
三国(日中韓)学生交流登山に関  
する招請があつた。(承認)

#### 【報告事項】

##### 1・支部総会報告

支部長交代・規約変更の報告の  
あつた支部の他、宮崎支部、関西  
支部、岐阜支部それぞれ総会報告  
があつた。

##### 2・ピオレドールの審査報告(萩原)

ジュリーとして審査にあつた  
萩原理事より審査経過の報告が  
あつた。

##### 当会が海外登山基金助成をし た「ローガン南壁隊」(横山勝丘、 岡田康隊員、昨年年次晩餐会で登 山隊報告を横山氏が実施)が、ジ ュリー6人の満場一致で見事に受 賞した。

#### 3・第6回通常総会開催案内(宮崎) NPO法人富士山測候所を活

用する会から、5月15日開催の通  
常総会案内が4月22日付であつた。  
**4・安全登山普及指導者中央研修  
会の開催案内(宮崎)**  
独立行政法人日本スポーツ振興  
センターから、同センター主催で  
7月1日~3日の間、国立登山研  
修所、周辺山域および雑穀谷岩場  
で実施する旨の開催案内があつた。

#### 5・震災義援金募集中間報告(成川)

東日本大震災の義援金募金は  
募金開始から約2月が経過した  
(募金活動は6月10日まで実施す  
る)が、この間270の会員とグル  
ープから約435万円の募金が寄  
せられた。当募金の使途について  
は今後各方面の考え方等を勘案して  
決めていきたい。

#### 6・登山者のための天気予報実施 報告(野沢)

予定通りゴールデンウイーク  
に実施した。利用者は増加してお  
り現在2215名となつていて。  
担当している猪熊気象予報士より、  
山研に観測機器を設置できれば予  
報の精度が向上するとの提案があ  
り検討したい。

## ルーム日誌

5月

#### 7・会報『山』5月号編集報告(神長)

25日 自然保護委員会 海外委員  
会 麗山会

26日 学生部 山遊会  
自然保護委員会

30日 JAC-YOUTH P.T  
スキークラブ

9日 総務委員会 スキークラブ  
九五会

10日 財務委員会 緑爽会 ス  
ケッチクラブ

11日 常務理事会 理事会 山想  
俱楽部 みちのり山の会

12日 集会委員会 山の自然学研  
究会

13日 会報編集委員会 フォトビ  
デオクラブ

14日 評議員会

16日 自然保護委員会 資料映像  
委員会 00会

17日 山岳研究所運営委員会 ス  
キーラブ

18日 三水会 スケッチクラブ

科学委員会 青年部 つく  
も会

19日 山岳地理クラブ

図書交換会

20日 総務委員会 支部活性化P  
T フォトビデオクラブ

21日 図書管理委員会 インター  
ネット小委員会 海外委員

22日 千葉支部 ゆきわり会

#### 会員異動(5月)

物故

山口京一 (2136)

平野眞市 (5750)

蓬田時男 (7524)

奥原廣次 (8405)

先水美智子 (9979)

中田俊宏 (13334)

阿部顕二 (4682)

小菅秋 (5387)

井上孝二 (5637)

野田四郎 (7830)

川上満子 (8363)

堀越淑子 (8744)

篠原健夫 (8745)

神谷平吉 (9015)

野田尚志 (10185)

楠田亮二 (10629)

漆山昌志 (10839)



北ア遠望

奥野溪石

原 篤司	野本秀旺
城由紀子	(1 1 2 2 5)
益田 武	(1 1 4 8 3)
勝俣秀幸	(1 1 5 6 2)
鈴木秀幸	(1 1 5 8 8)
長嶺弥恵子	(1 1 6 7 2)
赤塙富夫	(1 1 6 7 2)
千葉嘉彦	(1 1 6 7 2)
箕岡真子	(1 1 6 7 2)
宮崎太郎	(1 1 6 7 2)
赤羽康男	(1 1 6 7 2)
古川昭寛	(1 1 6 7 2)
(7 1 3 4)	(1 1 6 7 2)
東九州	関西
岩手	宮崎
北海道	信濃
	信濃
	信濃
	信濃

**終身会員**

松田

(7 1 3 4)

古川  
昭寛  
(7 1 3 4)

古川

(1 4 7 8 2)

箕岡  
真子  
(1 4 2 8 1)

箕岡

(1 4 2 8 1)

千葉  
嘉彦  
(1 4 2 8 1)

千葉

(1 4 2 8 1)

宮崎  
太郎  
(1 4 2 8 1)

宮崎

(1 4 2 8 1)

赤羽  
康男  
(1 4 2 8 1)

赤羽

(1 4 2 8 1)

長嶺  
弥恵子  
(1 4 2 8 1)

長嶺

(1 4 2 8 1)

赤塙  
富夫  
(1 4 2 8 1)

赤塙

(1 4 2 8 1)

千葉  
嘉彦  
(1 4 2 8 1)

千葉

(1 4 2 8 1)

宮崎  
太郎  
(1 4 2 8 1)

宮崎

(1 4 2 8 1)

鈴木  
秀幸  
(1 4 2 8 1)

鈴木

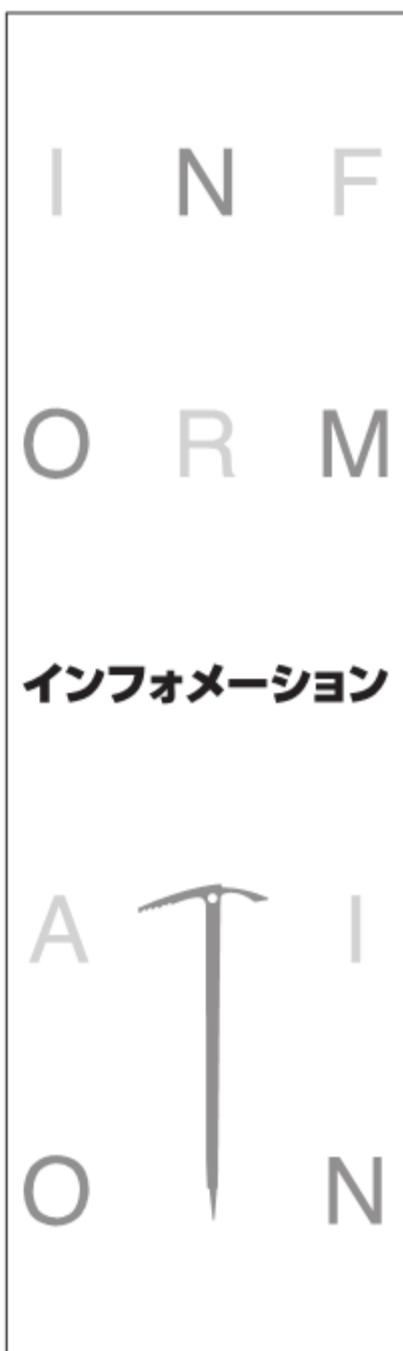
(1 4 2 8 1)

勝俣  
秀幸  
(1 4 2 8 1)

勝俣

(1 4 2 8 1)

原 篤司  
(1 4 2 8 1)



## INFORMATION

◆全国支部懇談会(兼東北地区集会)と記念山行の「」案内

宮城支部

平成23年度は、宮城で開催します。震災後、支部員一丸となつて開催に向け始動しました。日本屈指の栗駒山の美しい紅葉がお迎えします。ぜひお出かけください。

日時 10月15(土)～16日(日)

会場 栗原市栗駒町「ハイルザーム栗駒」

日程 15日～15時より記念講演  
(東北大大学大学院工学研究科 風間基樹教授「宮城県の地震災害」)、懇親会  
16日記念山行 A栗駒  
山登山、B世界谷地原生花園散策

費用 1万8000円(宿泊、懇親会、記念山行など)

定員 先着120名

申込 8月26日厳守で、①支部一括、②個人(ハガキ、FAX、E-mail)

で申し込む。支部名、16日の希望コース(A、B)を明示のこと。申込者に詳細を送ります。

申込・問合 佐々木まさ子  
(〒981-3203仙台市泉区高森3-4-326 FAX 022-378-1073)

✉ bpsamansa@jp.bigplanet.com

◆北ア最奥の高天原温泉と赤牛岳

集会委員会

北アルプス真ん中の高天原温泉を楽しみ、赤牛岳を経て黒部ダムに下る。1日の歩程5～10時間。現地集合解散。現地までの交通費は別途負担。

日時 9月12日(木)～15日(木)

集合解散 12日7時 JR富山駅

費用 4万円(タクシード代込)

定員 10名

申込 8月20日迄に、平井康司  
(TEL & FAX 042-323-5038)

✉ yasu.h.yasu@jcom.home.ne.jp

◆第18回上高地インタープリテーション

自然保護委員会共催

日程 22日～13時 速水林業「まちかど博物館」集合、講義

「森林認証制度と速水林業について、速水亨氏」「中國の大緑化計画(退耕還林)について、海老沢秀夫氏」

期間 7月30日(土)～8月15日(日)

・ガイドウォーク(大正池、明神池、小梨平方面)

費用 1万8000円(宿泊3食、講師料など)

611

✉ takeaki-kiku@hb.tpl.jp

◆紅葉と温泉を楽しむ「信越トレイル」トレッキング 集会委員会  
「信越トレイル」を2回に分け、第1回は鍋倉山から天水山までを歩きます。現地集合解散。現地までの交通費は別途負担。

日時 10月14日(金)～16日(日)

行程 鍋倉山～関田峠～伏野峠～深坂峠～天水峠

集合 14日(金)11時20分 飯山線戸狩野沢温泉駅

解散 16日(日)15時 飯山線戸狩野沢温泉駅

費用 2万5000円(宿泊、食事、入浴、送迎バスなど)

定員 20名

申込 8月20日迄に、平井康司  
(TEL & FAX 042-323-5038)

✉ kei35@gf6.so-net.ne.jp

◆第15回森の勉強会

関西・京都・東海支部共催

森林認証(FSC)制度のものに、持続可能な豊かで美しい環境管理型林業経営について学ぶ。

日時 10月22日(土)～23日(日)

場所 三重県紀北町「速水林業」

糸屋山荘)

期間 8月1日(月)～15日(月)

・子供スケッチ会(アルパインスケッチクラブの協力で開催)

期間 8月4日(木)～8日(月)

場所 上高地ビジターセンターのテラス

問合 柳田 効 FAX 045-962-13786

✉ kei35@gf6.so-net.ne.jp

◆第15回森の勉強会

森林認証(FSC)制度のものに、持続可能な豊かで美しい環境管理型林業経営について学ぶ。

日時 10月22日(土)～23日(日)

場所 三重県紀北町「速水林業」

期間 8月1日(月)～15日(月)

・子供スケッチ会(アルパインスケッチクラブの協力で開催)

期間 8月4日(木)～8日(月)

場所 上高地ビジターセンターのテラス

# 大学山岳部の復活奮闘記

## ②計画

落合正治(神奈川大学山岳部監督)

リ、エベレスト、ビンソン・マシフ  
である。

神奈川大学は昭和3年に開港の地横浜で米田吉盛先生により「質実剛健 積極進取」を建学精神に開学された。山岳部創部70余年の歴史の中で何回か海外遠征が持ち上がったがいつも計画倒れ。そこに飛び出した「七大陸最高峰制覇」を「大学創立80周年を祝う」イベントとして仕上げようと取り組んだのが、「夢抱き 夢育み 夢実現する」ドリーム計画である。

\* 昭和10年代、そんな神大に英国エベレスト登山隊に2度参加したジョン・モリス大佐が大学を訪れて、エベレスト遠征の講演をしている。不思議な縁である。

新生OB会を立ち上げたものの、人材も資金力も経験、力量、装備と無い無いづくしである。金欠病の学生と長期休暇の取れない

サラリーマンがこの壮大な計画に真正面から正攻法でぶつかっても無理と判断し、難易度、経費、日程等を考慮して決めた遠征の順番が、アコンカグア、エルブルース、コジウスコ、キリマンジャロ、デナ

7000ドルとセブンサミツツ第2の高峰であることやスペイン語圏での土地勘とリマ在住の先輩の参加が大きい。

4月の新人獲得は失敗したが、5月に入りひょんなことから村上俊男と、紅一点の秋田美人、西島亜希子が加わってクラブらしい活

気が出てきた。そして迎えた定期総会ではこの1年間の活動が功を奏してセブンサミツツ計画への取り組みが承認され、OB会支援による南米大陸最高峰アコンカグア遠征計画がスタートした。

さっそく、先発偵察隊の情報のもと12月24日、本隊7名が成田出発。チリのサンティアゴで現地参加のOBと合流してメン

ドサ経由でペルー・デル・インカより入山し、南壁トレッキングで順調に高度順応をしてB

ス入りした。年初にはニド・デ・コンドレスにC1を設営して、6日に5名でアタックし3名が登頂。7日、登頂者のサポートでC2を設営し、8日には3名がアタックして2名が登頂した。女性最年少の西島亜希子も登頂して、帰国後学長表彰を受ける。「ちょっとハイキングの心算だった」と、スナック菓子持参の山ガール。わずか4ヶ月のトレーニングで7000ドルの頂に日本人女子最年少記録20歳を記す。

この後、ビンソン・マシフの偵察を兼ねてブンタアレーナスからパタゴニアトレッキングを楽しみ、帰国の途についた。

計画立案から遠征準備、出発、帰国までエージェントを使わず、しかもガイドもボーターも雇わず、すべて自分たちだけの力で登頂を果たしたこの遠征で学んだ数々のノウハウは、後々の遠征に大きな成果をもたらしてくれた。

そしてこの遠征成功は支援をしてくれた多くのOBたちや現役学生の皆さんに自信と勇気、希望、夢を育み、これこそ神大健児の快挙と言わしめた。

定員 30名(先着順)  
申込 8月31日までに、東海支部  
の川合鉛一(〒441-0874 愛知  
県岡崎市竜美南3-3-1)  
FAX 0564-518916  
\*申込者に詳細を送ります

### ◆編集後記◆

卷頭は江本嘉伸さんに、いまどきの探検と冒険について書いていただきました。現地にとんでもないタ

イムリーなりポートです。

ギリギリボーリーズ隊はダッドメイン東壁初登頂、中村保さんは六つめの栄誉となるNZ山岳会名譽会員に。

みなさん、日本を元気にしてくれるすばらしい冒険者たちです。

マッキンリーに挑戦中の神長編集長に代わり、6月号を校了しました。  
**(奈良千佐子)**

### 日本山岳会会報 山 793号

2011年(平成23年)6月20日発行  
発行所 社団法人日本山岳会  
〒102-0081  
東京都千代田区四番町5-4  
サンピューハイツ四番町  
TEL 東京(03)3261-4433  
FAX 東京(03)3261-4441  
発行者 日本山岳会会长 尾上昇  
編集人 神長幹雄  
Eメール:jac-kaiho@jac.or.jp  
印 刷 株式会社 双陽社

(続)